

『わがゲートルの青春』発刊にあたって

編集委員会代表 金 沢 源 一

昭和十五年四月、私達は岩手中学校に入学しました。当時の日本は、昭和十二年七月に日中戦争が勃発し、昭和十三年四月に「国家総動員法」が施行され、昭和十六年十二月八日に太平洋戦争に突入するという時代でした。その頃「国民勤労報国協力令」が公布され勤労奉仕が義務化・法制化されて、学校でも日常生活でも軍事色が強くなっていました。学校では軍事教練が重視され、登校下校時には足にゲートルを巻き服装の点検、敬礼の仕方、返事の仕方まで厳しく指導されていきました。或る日の朝礼での事です。便所があまり汚れているのでこんな注意をされました。「貴様らのケツは曲がっているのか、ホースの方向操作の間違いか、いずれにしても攻撃目標に対し正確さが欠けている、目標に正しく落下させる、放尿しろ！」と。また、運動部の活動も制限され、敵国のスポーツということで廃部になったクラブもありました。

昭和十八年になって「勤労報国隊整備要綱」、「学徒戦時動員体制確立要綱」がやつぎ早に施行され、中学生にも動員体制がとられたのです。そして、遂に私達にも動員が発令されました。

昭和十九年七月十七日、他の学校の人達と同じ汽車で盛岡を離れ京浜地区に向かいました。私達の行き先は、横浜市鶴見区にある日本鑄造（株）鶴見工場でした。配属になった会社は鑄物工場で、一日中ホコリと騒音に悩まされ、お国のため、勝つまでは合言葉に生産に励んだのです。この間、私達は肉体的にも精神的にも貴重な体験をしました。この本に寄せられた皆さんの手記に、空襲の下、煤と鉄粉と土埃にまみれて作業をした工場

や、ノミ、シラミに悩まされながらも空腹に耐え、故郷の夢を結んだ紫雲寮での生活を、五十年後の今なお昨日のごとくに記憶され、生き生きとしたためられて居ることを知り、深い感慨にとられました。そして、昭和二十年五月の空襲で紫雲寮が全焼するまで、がらばっていた北条寛治君（故人）と和田莊君（高知県在住）の二人が、焼け出され、ドテラをかぶって盛岡に帰ってきた時の姿が、ありありと思ひ出されてきました。

戦争は占領下にあつて、物資不足・食糧難にあえぎながら、私達は日本の復興と共に歩み、現在に至っているわけです。しかし、あの戦争末期の、再びあつてはならない体験を、いま書きとめておかないと、永遠に埋没してしまうのでしよう。昭和六十二年八月十五日、盛岡ターミナルホテル（現メトロポリタンホテル）で開催された同級会で、金子実君が学徒動員での思い出の場所を訪ねた話をしてくれました。その際、動員中の回顧録風の記録の纏めを金子君にお願いすると共に、みんなに呼びかけ学徒動員の思い出や記録を書き残そうと合議しました。

その後、平成二年の同級会（盛岡駅前「うまいもんや」の席でさきに提起された動員時代の例の件を、藤沢芳雄君に具体的段取りをしてくれるように依頼しました。爾頼、藤沢君は粘り強くこの問題に取組みました。同級の全会員に原稿を書かせるため、直接面談したり千葉県まで出張して聞き取りする等、たいへんな努力を傾けてくれました。

平成四年「こずかた会館」、平成五年「つなぎ・ひまわり荘」の同級会において編集委員を選出し、協議を重ねること再三再四に及び、やっと本誌の刊行にまでこぎつけました。ほんとうにささやかな小冊誌ですが、永遠に忘れえぬ、私達のほろ苦い青春の息づかいが、随所にこめられております。どうかこの本を、五十年の昔をたどる道標としてください。

最後に、この本づくりにご協力を賜わった方々に、心から厚く御礼申し上げます。